

Open College

エル・ネット「オープンカレッジ」

教育情報衛星通信ネットワーク

el-Net

文部科学省委嘱

教育情報衛星通信ネットワークを利用した大学公開講座

札幌学院大学：北の文化

－考古学と言語学から－（全4回）

第3回 11月2日(金) 10:00～11:30

アイヌ語（1）

アイヌ語の概略・日本語との系統論をめぐって

札幌学院大学助教授

奥田 統己

高等教育情報化推進協議会

1. 歴史と現状

詳細は次回扱うが、本州の東北地方北部にはアイヌ語の地名が数多く存在する。このことはアイヌ語の歴史を遡って考えるうえで重要である。

江戸時代に入ると、さまざまなアイヌ語の記録が残されるようになる。それらの記録を見るかぎり、当時のアイヌ語と現在のアイヌ語とのあいだで、大きな発音・文法の変化があったということはできない。しかし現在のアイヌ語学の知識では説明できない単語などもあり、それらはアイヌ語の歴史的変遷を示すものなのかもしれない。

明治政府が開拓政策を進めるなかで、まもなく北海道の経済・社会のなかでは日本語が主に用いられるようになった。日本語による対アイヌ教育を柱の一つとする「北海道旧土人保護法」が1899年に施行されるなどの同化政策が行われたこともあり、アイヌ語は日常生活で用いられなくなっていった。そしてアイヌ語を話せる人の数は徐々に減っていった。

そのなかで、自らのアイヌ語や周囲のひとびとの知識を記録する動きが続いてきた。1923年には知里幸恵が『アイヌ神謡集』を公刊（遺稿）し、そのおば金成マツは英雄叙事詩などの筆録に長期間取り組んだ。金田一京助などの研究者に協力して自らの伝承を残している話し手も多い。

近年も、アイヌ自身によるアイヌ語の記録活動やさまざまなアイヌ語の学習活動が行われてきた。そして1987年にスタートした北海道ウタリ協会によるアイヌ語教室が段階的に開催地を増やし現在では全道十数箇所で開かれるようになるなど、アイヌ語を学ぶ活動は数多く行われるようになっている。

2. 方言

アイヌ語では標準語が定められていない。しかし、北海道・樺太それぞれのグループの内部での方言の差は、日本語の方言の差と比べそれほど大きくない。

これまでアイヌ語が話されてきたことが確実な地域のうち、東北地方の北部の方言については、地名のほか文法や単語を知ることのできる資料がほとんどない。千島列島の北端で用いられていた北千島方言についても、千語程度の単語しか知られていない。

北海道では日高地方の沙流方言(平取町・門別町・鶴川町)静内方言(静内町)、胆振地方の幌別方言(登別市)、石狩地方の千歳方言(千歳市)、上川地方の旭川方言(石狩方言とも呼ぶ、旭川市)、十勝地方の本別方言(本別町)などについて、まとまった資料が得られ文法の整理が進んでいる。樺太では西海岸のライチシカ方言がよく知られている。その他にも北海道・樺太の各地で、アイヌ語による物語や単語などの記録が残されている。

3. 表記と発音

アイヌ語は現在ローマ字、カタカナ、ひらがななどさまざまな文字と表記法で書き表されている。文字で書かれるようになったのは比較的新しく、またいわゆる正書法も未確定である。しかし現在のアイヌ語は文字を持つ言語だということができる。カナ表記の場合にも、アイヌ語にあって日本語にはない音を表記するためにさまざまな新しい表記法が編み出されている。

ここでは、現在広く用いられているカタカナ表記とローマ字表記に基づき、まず日本語の五十音にあたる表を示す。

ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o
カ k a	キ k i	ク k u	ケ k e	コ k o
サ s a	シ s i	ス s u	セ s e	ソ s o
タ t a		トゥ t u	テ t e	ト t o
チャ c a	チ c i	チュ c u	チェ c e	チョ c o
ナ n a	ニ n i	ヌ n u	ネ n e	ノ n o
ハ h a	ヒ h i	フ h u	ヘ h e	ホ h o
パ p a	ピ p i	プ p u	ペ p e	ポ p o
マ m a	ミ m i	ム m u	メ m e	モ m o
ヤ y a	イ y i	ユ y u	イエ y e	ヨ y o
ラ r a	リ r i	ル r u	レ r e	ロ r o
ワ w a	ウィ w i		ウェ w e	ウォ w o

アイヌ語には、日本語でいう「つまる音」「はねる音」にあたる発音の種類が多い。下に示す例のように、この発音によって全然別の言葉になることもあるので、学ぼうとするときには注意する必要がある。

カナ文字を用いて表記するときには、これらを書き分けるために小さめの活字を用いるなどさまざまな工夫がなされる。

sap サブ(意味は「(前へ)出る(複数形)」)

sat サツ(意味は「乾く」)

sak サク(意味は「夏」または「～を欠く」)

(樺太の諸方言では多くの場合これらの代わりに「sahサハ」のような「小さいハヒフヘホ」の発音になる。)

ran ラン(意味は「降りる(単数形)」)

ram ラム(意味は「低い」)(ramuラムの意味は「思う」)

as アシ(意味は「立つ(単数形)」)(asiアシの意味は「立てる(単数形)」)

kar カラ(意味は「作る」)

kir キリ(意味は「髄」)

kur クル(意味は「影」)

ker ケレ(意味は「靴」)(kereケレの意味は「触る」)

kor コロ(意味は「持つ」)

4. 文法

アイヌ語の文の組み立てかたは、すでに述べたとおり、日本語などとよく似ている。たとえば次の表現はいずれも可能で、基本的に同じ意味になる。なお以下の例はいずれも静内方言である。

ヘカチ	シト	ポロンノ	エ
hekaci	sito	poronno	e.
男の子(が)	団子(を)	たくさん	食べた

ヘカチ ポロンノ シト エ。
hekaci poronno sito e.
男の子(が)たくさん 団子(を)食べた

シト ポロンノ ヘカチ エ。
sito poronno hekaci e.
団子(を)たくさん 男の子(が)食べた
「男の子が団子をたくさん食べた。」

名詞は前から修飾され、助詞・助動詞などは名詞や動詞のあとに置かれる。

オンネ フチ シピチャラ ウン オマン ナンコロ。
onne huci sipicar un oman nankor.
年老いる お婆さんが 静内 に 行く だろう
「年を取ったお婆さんが静内に行くだろう。」

ただし否定の要素は、日本語では助動詞なので動詞のあとに来るが、アイヌ語では副詞なので動詞の前に位置することになる。

ソモ イタク。 イテッケ イルシカ。
somo itak. itekke iruska.
～しない 話す ～するな 怒れ
「話さない」 「怒るな」

アイヌ語では、動作の主体や対象が話し手なのか聞き手なのか特定の第三者なのか不特定の人なのかまた単数か複数か、といった人称や数の区別を、動詞に表示しなければならない。たとえばイタクitak「話す」という語に人称と数とを表示すると次のようになる(=は人称表示の区切りを表す)。

クイタク イタクアシ
ku=itak itak=as
私が話す 私たちが話す

エイタク	エチイタク
e=itak	eci=itak
あなたが話す	あなたたちが話す

また「～で」「～に」のような、日本語の助詞に相当するものが動詞の前に付け加えられて新しい動詞ができることもある。たとえばイタクitak「話す」のまえにコko「～に」を付け加えてコイタクkoitak「～に話す」という動詞が作られる。

クコイタク	チコイタク
ku=ko-itak	ci=ko-itak
私が～に話す	私たちが～に話す
エコイタク	エチコイタク
e=ko-itak	eci=ko-itak
あなたが～に話す	あなたたちが～に話す
エチコイタクアン	アエンコイタク
eci=ko-itak=an	a=en=ko-itak
私があなたに話す	人が私に話す

人称は身体や家族などの名詞にも表示されることがある。

パケ	クパケ	ホク	エホク
pake	ku=pake	hoku	e=hoku
頭	私の頭	夫	あなたの夫

これらの点は日本語にはみられない特徴である。

5. 日本語との歴史的関係

アイヌ語と日本語とがもともと同一言語から分かれてきたのだ—同系である—という主張は数多い。しかし現在のところいずれも十分な証明はできていない。またデータの扱いや分析方法の甘さから見て今後の研究の土台にすることすらで

きない説も広められているので、注意が必要である。

たとえば梅原猛の説（『アイヌと古代日本』小学館、1982年など）はアイヌ語の文法や単語についての誤った知識に基づいている。一例をあげれば、アキ arki（「来る」）という単語について「今の日本語では歩くという運動を表しますが古代日本語ではアイヌ語と同じように場所を移動するという意味となります」（『アイヌと古代日本』352ページ）と述べている。おそらく古代日本語の「ありく」との対応を想定しているのであろう。しかし、アイヌ語には「歩く」「移動する」という意味のアプカシ apkas という全く異なる単語が存在する。「ありく」との比較を試みるならば、アイヌ語からはむしろこの語が取り上げられるべきである。

また片山竜峯の説（『日本語とアイヌ語』すずさわ書店、1993年など）は「似ている単語」を認める基準が緩やかすぎる。ある学生が彼の説を整理してみたところ、たとえばアイヌ語の t に対して日本語の t、d、s、r、z、n などが自由に結びつけられ、いっぽう日本語の t に対してアイヌ語の c、n、r、s、t などがやはり自由に結びつけられていることがわかった。このような方法では、2つの言語のあいだで意味の似ている単語のペアを用意すれば、かなりの割合で対応づけることが可能になる。つまり、日本語に限らず世界のさまざまな言語とアイヌ語とのあいだに「同系の可能性」が生じることになってしまうだろう。

これらの説は、そもそもこの分野の研究の進展に寄与するところが少ないため、正面からアイヌ語研究者の批判を受けることも少なかった。しかし批判を受けないことをもって「ほぼ通説になった」などと評価されるとすればよくないことである。

また「証明には至らなくても、仮説の提示または論点の提示としての価値はあるのではないか」と擁護する考えもあるかもしれない。しかし仮説とは、科学的な批判と検証にたえる事実を踏まえながらなお証明にいたらない推論のことである。またアイヌ語と日本語の系統論は明治以来の研究テーマであり、梅原猛らが新たに提示した論点ではない。

アイヌ語には、とくに文の組み立てかたなどの点で、確かに日本語と似たところがある。しかし同じような類似は、アイヌ語と日本語に限らず世界のさまざまな地域のさまざまな言語のなかにも見ることができる。いわばアイヌ語も日本語も、人間の言語のなかでは比較的よくある文の組み立てかたをする言語なのである。

単語の組み立てかたや動作の主体や対象の表しかたなど、文法的に両者が大きく異なる点もある。単語の発音と意味とを比較してみても、アイヌ語と日本語とで類似している組み合わせはそれほど多くない。歴史的に交流の深かった民族どうしの言語なので、一方からもう一方への借用語だと考えることのできる範囲である。

日本語との同系論以外のアイヌ語の起源説にも、いまのところ十分な立証を行ったものはみられない。北東アジアには、やはり他の言語との関係がわからない言語がいくつかある。成り立ちがまだ解明されていないのは、アイヌ語と日本語だけに限った事情ではない。言語の成り立ちや関係は、結論を急がずに調べなければならない問題なのである。